

学校改善と授業評価 (Ⅲ)

—普通科・工業科クラスの授業評価を中心にして—

山崎清男*・深尾 誠**・岡 義宏***

【要旨】 社会が複雑化・高度化するにしたがい、学校も変革することが求められている。従来の学校のあり方では、学校に対する社会および生徒の期待や要求に応えることができないからである。その意味で、学校改善が求められている。学校改善の方法としてさまざまなことが考えられるが、生徒による授業評価は重要な意味を持つと思われる。生徒による授業評価をおこない、授業に対して生徒がどのように取り組み、授業をどのように評価しているかを調べ、その問題点を明らかにすることは重要である。そこで高校生による授業評価を試みた。今日高校には多様な興味・関心を持った生徒が入学してくる。高校の授業は、生徒の多様な興味・関心をふまえておこなわれなければならない。そのような多様性をふまえた授業を展開することも、学校改善につながるといえよう。

その多様性を探るため、今回は職業系コースと普通科系コースという教育課程の異なる生徒を対象に授業評価を行った。コースの違いにより多くの差異がみられた。このことから、学校種と教育課程、そこでの生徒の実態をふまえた授業の改善・工夫が求められているといえよう。

【キーワード】 授業評価 学校改善 授業経営 学校改革

はじめに

近年大学では、積極的に授業評価が導入されてきている。そこにはさまざまな理由が存在するが、学生と教師が共に授業に向き合い、授業のあり方を検討することを通してよりよい授業を創造し、大学教育の改善を視野に入れた活動がおこなわれていると思われる。換言すれば、大学教育の改善の一環としての授業評価が存在しているといえよう。今日多様な興味・関心を有する生徒が大学に入学している実態を考慮すると、大学の授業のあり方も変革を迫られているといっただよい。事実多くの大学で授業改善のための授業評価に関して、さまざまな取り組み

平成 19 年 10 月 31 日受理

*やまさき・きよお 大分大学教育福祉科学部

**ふかお・まこと 大分大学経済学部

***おか・よしひろ 大分県立津久見高等学校

が展開されている。

このような授業評価は、もはや大学のみの問題ではなくなっている。¹⁾ 義務教育学校や高等学校等でも積極的に取り組まれねばならない問題であると思われる。しかし、授業評価が行われていないのが実情であろう。学校は、当然のことであるが教育目標の効果的達成を使命としている組織である。教育目標を達成するために、日々授業がおこなわれているのであるが、この授業をよりよいものにするために評価は必要である。

1996年7月に出された中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(第1次答申)では、これからの学校教育の目指すべき基本的方向として「子供たちが、自ら学び、自ら考える教育への転換を目指す」ことを謳い、学校改革推進の必要性を指摘した。従来の学校のあり方を振り返り、効果的に教育目標を達成する学校を追求する意味で、学校改善が要請されているのでありそのための授業評価が求められているのである。

ところで学校改善とは何を意味するのであろうか「学校改善とは各学校が子どもの行動変容に対応した教育ビジョンを共有化し、これを達成するために、学内・外の支援を得ながらも、なお固有の自律的な社会的組織体として、学校のウチとソトとの間に開かれた協働文化を形成することによって、自己改善を継続的に遂行していく経営活動である」²⁾ といえる。中留も指摘するように文部省→都道府県教育委員会→市町村教育委員会→学校→教師→子どもというトップダウン型ではなく、ボトムアップ、すなわち学校と子どもの多様なニーズに対応する教育を実践しようとすることをねらいとしている。³⁾ このような学校改善を推進するひとつの方法として、授業評価の活用は有効性を持っていると思われる。

そこで教師が日々行っている授業実践を振り返り、学校改善に資することを目的として授業評価を行った。今回は1校の高等学校で、将来の進路選択によりコース(学級)が分けられている生徒を対象に授業評価を実施した。⁴⁾ 同一教師の授業がコース(専攻)によってどのように評価されているのか、もし評価に違いがあるとすればその理由は何なのか、またなぜそのような評価されるのか等の要因を分析し、そこでの問題点を析出することにより、進路コース別授業のあり方に関し改善方を提示することを試みる。

調査の対象と方法

1 調査対象

大分県立高等学校1校の教師4名にお願いし、担当授業終了時に生徒による授業評価を実施した。⁵⁾ 調査対象校は普通科と工業科(2学科)から構成されている高等学校である。調査の方法は質問紙法を用いた。調査時期は2006年12月から2007年1月である。

調査対象教師の属性として年齢、性別、担当教科、教職経験年数、教職以外の職業年数、経験勤務校数、経験学校種(普通科、実業系、障害児系、総合学科、夜間定時制)、対象学年をとあげた。

具体的には20代1人、30代1人、40代2人である。性別は男性3人、女性1人である。担当教科は理科(1人)、地歴公民(1人)、工業(2人)の3教科である。教職経験年数は3年から27年におよんでいる。また1人の教師が1年以上の教職以外の職歴を有していた。経験勤務校数は3校以下が3人、12校以上が1人である。経験学校種は普通科が2人、実業系が2人、障害児系が1人、総合学科系が0人、夜間定時制が1人であった。

調査対象学年は1年生4クラス（159人）、2年生3クラス（107人）、3年生3クラス（109人）の合計375人から回答を得た。

2 調査項目

主な調査項目は、調査対象教師の授業の進め方に対する生徒による評価項目（板書、話し方、質問の仕方、励まし方、授業のすすめ方など）、授業に対する生徒による評価項目（わかりやすさ、満足度など）、生徒の授業に対する態度項目（ノート作成、積極性、宿題や予習・復習の実行など）の36項目である。⁶⁾ 回答はそれぞれの項目に対して、「1. はい」「2. どちらかといえばはい」「3. どちらかといえばいいえ」「4. いいえ」のいずれかに回答してもらった。

結果および考察

1 教師の授業のすすめ方、方法等に関する評価

1) 板書の仕方・話し方・進度

授業の進展や生徒の授業理解を助ける手段として、教師の板書や話す声は重要である。生徒は教師の板書に対しては「字はわかりやすく」（74.7%）、「整理されていて」（75.5%）、「板書のスピードは適切である」（80.0%）と74%以上の生徒が肯定的評価をしている（肯定的評価は「はい」＋「どちらかといえばはい」の値を意味する）。また教師の話す声は「聞き取りやすい」（82.4%）と多くの生徒が肯定的評価をしている。

教師の話の内容に関し「話の内容はおもしろい」かどうかをたずねてみると、「話の内容がおもしろい」と肯定的評価を与えている生徒は57.4%であった。裏を返せば40%以上の生徒が教師の話の内容をおもしろくないと感じている。話の内容がおもしろいかどうかの基準ははっきりしないが、興味を持って授業に取り組んだり、あるいは授業に対するモチベーションを高めるものであるとか、生徒の「力」を踏まえた内容であるとか、授業科目の得意、不得意等さまざまなことが考えられよう。

では授業の進度に関してはどのように評価しているのであろうか。「授業の進む速さは適切である」かどうかをたずねてみると、適切であると肯定的評価をしている生徒は73.8%である。70%以上の生徒が授業の進度は適切であると評価している。比較的高い評価を与えていると思われるが、これは授業科目によっても異なってくるが、調査に参加していただいた教師の授業に対するさまざまな取り組みの結果が評価されているといえるかもしれない。

ここで工業科と普通科の差異をみてみよう。差異のする項目は「板書のスピードの適切さ」と「話し方の単調さ」、「授業進度の適切さ」に対する評価である。「先生の話し方は単調で退屈である」と回答しているものは工業科43.4%、普通科19.8%である。また「話の内容はおもしろい」かどうか質問してみると、肯定的評価をしているものが工業科の39.8%に対して普通科は74.9%である。さらに「授業の進む速さ」が適切かどうかに関する肯定的評価は、普通科の生徒80.7%に対し、工業科の生徒は67.4%である。

「話の面白さ」に関しては、工業科の生徒の肯定的評価が、普通科の生徒に比べてかなり低いこと注目すべきである。これは工業科目のなかには、理数系の学問の抽象的な部分を含んだものもあり、その科目に対する生徒の理解不足や生徒が基礎的部分を十分理解していないので、その後の理解が困難になるという教科の特質もあるのかもしれない。また工業科の生徒は各種

の「検定試験」や「達成度テスト」が随時あるので、進度やレベルをあまり低下させることができないということや、普通科に比べて「学力」的にやや落ちる生徒の存在が多いということも、このような結果を導き出したといえるかもしれない。いずれにしても、今回のアンケートは生徒の「学習到達度」的な結果とクロスさせる方法をとってない。したがって、どのような学力層の生徒がどのようなアンケートの回答傾向を示しているかを明らかにすることはできないが、今後は検定試験や模擬試験等の結果も踏まえて分析する必要があるだろう。

調査結果からみる限り、これらの項目に関しては普通科の生徒のほうが肯定的に授業評価を行っている。いいかえるなら、工業科の教師の授業のすすめ方はもう少し生徒の視点から見ることも必要といえるかもしれない。⁷⁾ ただし授業に対する生徒の興味関心やモラル等、さまざまな要因が関係していると思われるので、単純に工業科教師の改善点のみを問題にすることはできない。

2) 質問の具体性・わかりやすさ

いうまでもなく、授業を展開する際の教師の質問（発問）は重要なウエイトをしめる。また教師の質問や授業中の指導のあり方は、生徒が授業の理解を深めるためにも重要である。授業中に、教師が生徒に対して行う質問の具体性に関してたずねてみた。「先生の質問はわかりやすい」かどうかをたずねてみると、72.5%の生徒がわかりやすいと肯定的に回答していた。また「先生の質問は要点を理解するのに役立つ」かどうかをたずねてみると、役立つという肯定的回答は79.5%である。さらに多くの生徒は「先生の説明はわかりやすく」（84.0%）、「先生の指示」もわかりやすい（80.0%）と感じている。このことから、生徒は教師の質問の仕方や説明の仕方にそれなりに満足しているということがいえよう。

それでは、教えようとしている「科目の目的や学習方法について先生から具体的な指導がなされた」かどうかをたずねてみると、67.8%の生徒が肯定的回答をしている。30%以上の生徒が学習しようとする教科の目的や学習方法に関し、教師から具体的指導を受けていないと感じていることになる。学習効果をあげるためにも、生徒が理解できるレベルでの教科の目的や学習方法に関する具体的指導は必要と思われる。

続いて工業科と普通科の差異をみてみよう。t検定の結果有意な差異がみられたのは「質問がわかりやすい」（工業科・63.9%、普通科・81.8%）、「質問は要点を理解するのに役立つ」（工業科・75.5%、普通科・84.3%）、「説明はわかりやすい」（工業科・78.4%、普通科・90.1%）、「科目の目的や学習方法について具体的な指導がなされた」（工業科・59.5%、普通科・77.0%）であった。それなりの満足度は示されていると思われるが、普通科の生徒のほうがより満足度が高いといえよう。⁸⁾

授業中の教師の質問の「質」と「量」は、授業展開や授業の内容定着のためには欠かすことができない事項である。授業内容の量的側面が重視されると、生徒の授業理解に対する実態を把握しながらの授業展開が不可能になると思われる。授業展開、授業の進度とのかかわりの中で教師の質問のあり方が考えられなければならない。

3) 教師の生徒の受けとめ方

授業において、生徒が教師にどのように受け入れられていると感じているかをみてみよう。ここでいう「受け入れられる」とは、授業中における生徒への励ましや生徒の発言等をよく聞き、そしてそれらに対処するということを意味する。全体的傾向をみてみると、「先生は生徒の発言をしっかりと聞いてくれる」という項目に対しては85.9%の生徒が肯定的評価を与えている。

しかし「先生は生徒がわからないとき適切な励ましを与えてくれる」という項目に対しては、肯定的評価は66.7%である。この数字をどのようにみるかであるが、そう高い評価ではないといえる。つまり30%以上の生徒が、授業中わからない時、教師は適切な励ましを与えてくれると考えていないと思われる。生徒の発言はしっかりと聞いてくれるが、わからないときには思ったほど適切な励ましを与えてくれないと感じている生徒が、それなりに存在するということである。

その反面「先生は生徒がやったことに対して適切に評価してくれる」と81.6%の生徒が感じている。生徒の多くは教師が自分たちの発言にしっかりと耳を傾けてくれ、適切な評価を下してくれるが、しかし授業で自分たちがわからないときには「適切な励まし」を求めているということが推測できよう。いうまでもなく、授業では生徒に一定の内容を獲得させることが要請されている。したがって、教師が予想する授業進度と生徒の授業理解の間に齟齬が生じる場合がある。このような齟齬が、生徒の授業に対する評価の差となって現れるといえるかもしれない。その差をどのように埋めるのかということが、換言すれば授業経営の問題としてどのように解消していくのかということが求められていると思われる。

工業科と普通科の生徒の差異をみてみよう。「先生は生徒の発言をしっかりと聞いてくれる」という項目に関しての肯定的評価は、工業科の生徒が80.1%、普通科の生徒は92.2%であり、普通科の生徒の肯定的評価が高い。また「励ましを与えてくれる」(工業科・57.4%、普通科・76.1%)、「生徒がやったことに対して適切に評価してくれる」(工業科・75.6%、普通科88.5%)という項目に対しても普通科の生徒が肯定的評価を与える割合が高い。質問項目に対する肯定的評価が工業科と普通科の生徒では差異がみられる。この差異をどうとらえるかはきわめて難しい問題であるが、授業さらに授業を通しての学校改善を推進する場合多方面から考えられなければならない問題であろう（図1は授業のすすめ方等に関する肯定的評価結果の一部を示したものである）。

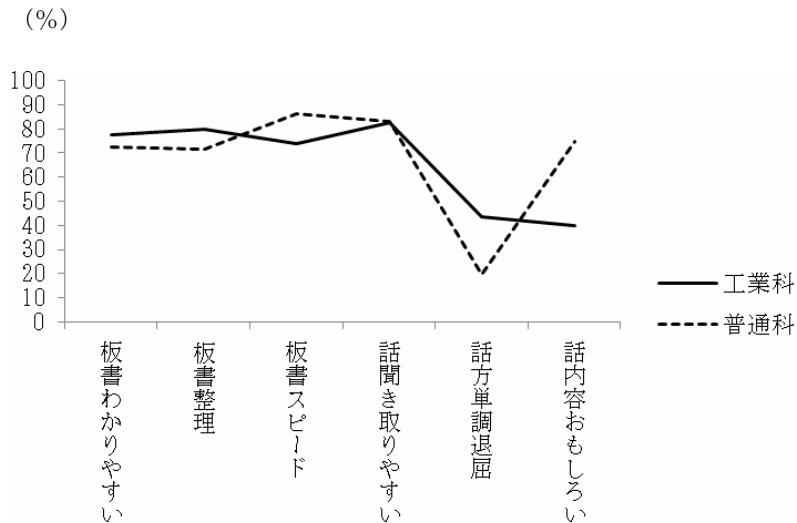


図1 授業のすすめ方（肯定的評価）

2 授業の雰囲気・緊張感、教師の熱意と生徒に対する観察

1) 授業の雰囲気

生徒が授業の雰囲気をどのように感じているかは、教師が授業展開する上で十分理解しておくべきことである。まず「授業には何でも質問できる雰囲気がある」かどうかをたずねてみると、61.0%の生徒が肯定的評価を与えている。裏返せば40%近くの生徒が授業中、質問しにくいと感じていることになる。「授業で勝負する」という言葉があるように、教師にとって授業はある意味では「命」である。授業を通して生徒が考え、認識を深め自己変革等を遂げるとするならば、授業はきわめて重要なものである。この授業の中で質問しにくい雰囲気があるとすれば、早急な改善が教師には求められる。

いうまでもなく、教師にすべて責任があるわけではなく、学級集団の雰囲気や生徒間の人間関係などの諸要因が考えられるが、それらの改善を通して教師、生徒とも授業に取り組みやすい雰囲気をつくるのが重要である。この項目に関しては、t検定で工業科と普通科の間に有意な差異はみられなかった。

2) 授業の緊張感・教師の熱意

授業を展開していく際、教師と生徒双方が適度な緊張感を持つことは必要である。「授業には緊張感がある」かどうかをたずねてみると、全体の48.3%の生徒は緊張感があると肯定的回答をしている。生徒が緊張感をどのように理解しているかという問題も残るが、緊張感が「恐怖感」でないことはいうまでもない。学校およびクラス集団の風土や文化等が、授業の緊張感にも表れていると思われるが、生徒に「迎合」することなく緊張感のある授業を創造することは、教師の力量とも関係してこよう。

工業科と普通科を比較してみると、顕著な差異がみられる。授業に緊張感がみられるとする生徒は工業科37.0%に対し普通科59.7%である。この差異をどのように解釈するかは難しいところであるが、授業に対する興味・関心、教師－生徒間の人間関係等前述したさまざまな要因が作用していることは事実であろう。⁹⁾

工業科の一つのクラスの中の学力差は大きいものがある。将来の就職に関して、強い意識と国立大学に合格しうると思われる学力を持って部活動との両立をおこなう生徒がいる反面、学力的にも低く学習に対する意欲の弱い生徒まで、さまざまな生徒が存在する。このことはアンケートの結果にばらつきが大きいこと、つまり標準偏差が高いことからもうかがえよう。教師は、学力幅の広い生徒を一つの教室で授業する事の困難を感じながら、日々教育活動を行っているといえる。

続いて「授業には先生の熱意が感じられる」かどうかを質問した結果をみてみよう。全体的にみると80.9%の生徒が授業に対する教師の熱意を感じている。これを工業科と普通科でみてみると、20%以上の差異がみられる（工業科・70.1%、普通科・91.7%）。授業の緊張感と教師の熱意の相関ははっきりしないが、生徒が緊張感を持って授業に望まないと、授業に対する教師の熱意を感じにくいといえるかもしれない。このことが、生徒が授業に対し感じる緊張感と熱意との間にみられる「差」となって表れているといえるかもしれない。

また授業に関係することとして、「先生は忘れ物、居眠り、内職などを注意することが多い」かどうかをたずねてみると、工業科生徒の85.5%、普通科生徒の75.9%が肯定的に回答をしている。この数字からのみ判断すると、恒常的に注意がなされている様子が見えてくる。このことは、「注意を与えられる」生徒がいる場合にそれを見逃さない教師が「注意を与える」ことで

授業の流れが中断され、多くの「まじめ」な生徒にとっては授業において「緊張感」を感じられない結果を生み出すことも考えられるかもしれない（図2は、授業の雰囲気等に関する肯定的評価の一部を示したものである）。

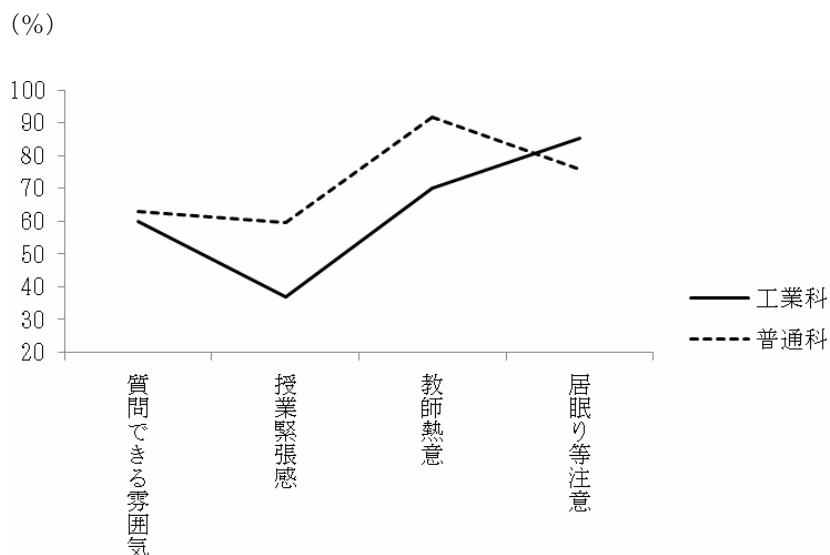


図2 授業の雰囲気（肯定的評価）

3 生徒の授業への取り組み方および授業の認知度・満足度

1) 授業の予習・復習

生徒がさまざまな知識や技術を学び、それを基礎に生徒自身が自己を形成していく手段として、授業は重要な役割を持っている。この授業を効果的におこない、生徒にとって意味あるものとするためにも授業の予習・復習は欠かせないと思われる。生徒はこの予習・復習に対し、どのように取り組んでいるのであろうか。まず「授業の予習をしている」かどうかをたずねてみると、肯定的回答をした生徒は17.8%であり、まったく予習をしていないと回答した生徒が58.1%いた。復習に関しても、「授業の復習をしている」と肯定的回答をした生徒は15.8%にすぎない。まったく復習していない生徒は58.1%にのぼる。当然教科によって差があると思われるが、予習・復習をしなくても学校の授業（学ぶ内容）に「ついていける」と考えている結果かもしれない。授業を効果あるものとするためにも、特に予習は不可欠なものと考えられる。学習習慣の形成をふくめて、十分な指導が要請されることである。¹¹⁾

工業科と普通科の比較をしてみる。「予習をする」生徒は工業科が7.2%、普通科は28.1%である。また「復習をする」生徒は工業科が10.4%、普通科は28.1%である。たしかに工業科と普通科において差異はみられる。しかし両者とも肯定的回答の割合がかなり低い。特に工業科において予習・復習の取り組みは著しく低いといえる。

一般的に学力に問題がある（厳しい）学校であればあるほど、ほとんど宿題を出さなくなるといえよう。また、予習や復習が必要となるような授業展開であると、その時点で授業につい

てこられない生徒が出てくるので、予習や復習を前提にした授業内容の構成はおこないにくい。また、低学力の生徒は一般的に家庭学習の習慣がついていないことが多いと思われる。家庭に学習課題を持ち帰らせると、その課題をおこなうことなく学校へ登校してくる場合も多々あり、教科書類も学校へ置いたままの生徒もいる。

宿題を出さないで家庭学習が出来ないのか、家庭学習をしないので宿題を出さないのかは、「卵が先か鶏が先か」という問題になるが、教師は家庭学習をおこなわせることに関してはコントロールしにくい。したがって家庭学習をおこなわせるより、現実的には放課後に残して学習指導をおこない自宅でやるべき宿題を学校でおこなうという指導方法をとることが多くなるといえよう。

ベネッセの行った第4回学習基本調査（2006年6～7月、高校2年生、東京都内、東北・四国・九州地方の都市部と郡部の全国4地域の普通科を対象、4464名）によると、¹⁰⁾ 平日の学習時間の平均は70.5分だが、偏差値45未満のグループでは43.2分であるというデータが出ている。工業高校のデータはないが、多分これより少ないと思われる。そこで、授業を通じて家庭学習を増やすような指導法や評価の工夫が必要となる。生徒の実態に合わせて、個人で取り組める学習内容を開発して家庭で習慣的におこなわせることが必要であろうし、評価や指導方法の開発もそれに合わせて必要になるといえよう。

2) 授業の集中

生徒は学校での大半の時間を、授業を受けることにより過ごす。その意味においても授業は重要なものである。授業への集中度をたずねてみると「授業には積極的に参加している」と、肯定的回答をする生徒は72.0%であり、70%以上の生徒が授業には積極的に参加していると自己評価している。また「授業中に居眠りや他のことをしないようにしている」生徒は88.0%である。授業に積極的に参加し、居眠りや他のことをしないようにしていると考えている生徒が比較的多いと思われる。しかし「先生は忘れ物、居眠り、内職などを注意することが多い」と78.1%の生徒が回答している事実をどのように考えたらよいのであろうか。生徒は授業中、居眠りや他のことをしていないと過大に自己評価しているといえるかもしれない。

工業科と普通科の差異をみてみよう。「授業中に居眠りや他のことをしないようにしている」（工業科・82.7%、普通科・94.3%）、「授業に積極的に参加している」（工業科・65.2%、普通科・79.2%）で、いずれも普通科の生徒の肯定的回答が多い。いうまでもなく、授業への積極的参加には生徒の授業への興味・関心や授業内容の理解度等とも相関があると思われる。「授業で勝負する」という言葉をすでに述べたが、生徒が主体的に参加し得る授業をどう創っていくかということは、教師に与えられた大きな課題であることは否定できない。

第IV報で論ずる予定であるが、授業への積極的参加と「授業の緊張感」、「教師の熱意」の間には一定の相関が見られる。この要因として個々の教師の属性（パーソナリティ）等を見無視することはできない。個々の教師の属性（パーソナリティ）と生徒の積極的授業参加等の関係も解明すべき課題である。

3) 授業に対する心がまえ

授業への積極的参加と授業に対する「心がまえ」は、相即不離の関係であろう。生徒は自分自身の授業への心がまえを、どのように評価しているのであろうか。「ノートや教科書等の忘れ物はしないようにしている」（94.1%）ことを心がけている生徒はかなり多い。しかし教科書類を家庭に持ち帰ることなく学校に置きっぱなしであるという現実があることを考えると、こ

の項目に対する回答はそのまま評価しえるかどうか問題であろう。

また「宿題は必ずやっている」(72.5%)生徒も70%以上いるが、この項目をもう少し詳しくみてみると、「どちらかといえばいいえ」(19.7%)、「いいえ」(7.2%)という選択肢に対する回答率は低いものの、30%近い生徒は必ずしも宿題をしているわけではない。最初から「全くやる気がない」と考えられる生徒も7.2%存在する。すでに指摘したが、このような生徒をどのように指導するかも重要な課題である。

続いて「授業中に疑問点を質問している」かどうかをたずねてみると、質問しているという生徒は22.7%にすぎない。疑問点が生じても全く質問しない生徒が45.1%も存在する。授業を十分理解していないため、質問しにくいあるいは質問するのがはずかしい等さまざまな理由があると考えられるが、授業に関する疑問点をそのままにしまうと、ますます授業に対する興味・関心がなくなることは疑いない。

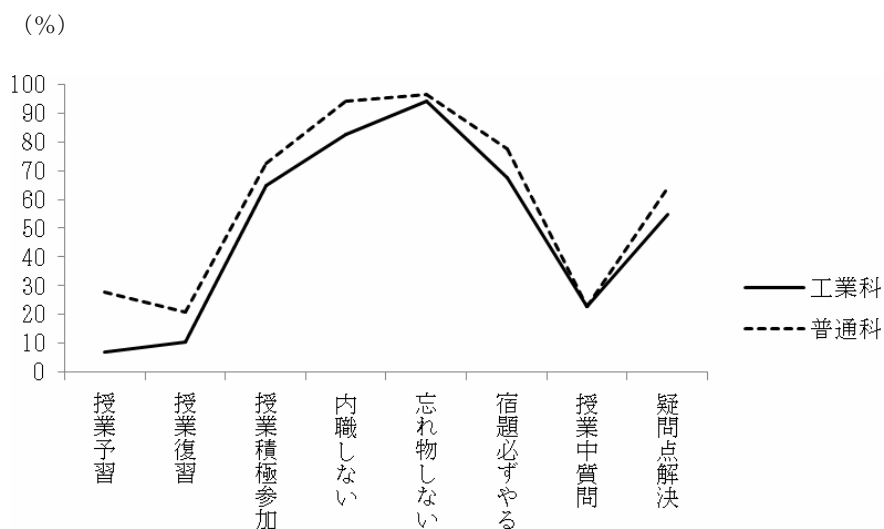


図3 生徒の授業へのとりくみ（肯定的評価）

さらに「疑問点は友人や先生に聞いて解決しようとしている」かどうかをたずねてみると、59.2%の生徒が授業の疑問点を友人や先生にきいて解決しようとして試みている。しかし約40%の生徒は、そのまま放置しているといえよう。宿題をする、授業中の疑問点を積極的に解決するなど、主体的関わりを要請されることに関してはさほど積極性がみられないといえるかもしれない。このような結果は、今回の調査対象者のみにみられるのではなく、前回の調査でも指摘されたことである。¹⁾²⁾ 授業にどのように関わっていくかという、生徒の主体性・自主性の問題と関係するかもしれないが、性格上クラスメートの前で質問することに躊躇する生徒が存在することも事実である。このようなことをふまえて、教師が、生徒の疑問点をどのように解決させるのかということが求められている。

一般的にいうなら、授業内容が「難しく、理解困難である」場合、質問をしにくいということはいえよう。しかしまた授業内容が簡単であると質問も出にくいということも事実である。

したがって、生徒の理解度をふまえ、状況に応じて生徒の疑問点を刺激し引き出しうる授業を創りだしていく力量が教師に求められているといえる。たとえば、授業中に班別グループ学習等の学習集団の構成などをおこなうことも必要になろう。生徒に対して、生徒同士の相互学習を計画的に組み、授業における質問のしやすさと生徒同士の互いの学習関係の深化を図ることで、生徒がより自主的・主体的に学習に取り組むことも考えられる。

工業科と普通科の差異をみてみよう。有意差のみられるものは、「宿題は必ずやっている」（工業科・67.9%、普通科・77.6%）の1項目であった。授業にのぞむ際の心がまえを「宿題」の点からみた場合、宿題をする生徒の割合は普通科の生徒の方が高い（図3は、生徒の授業への取り組みに関する肯定的評価の一部を示したものである）。

4 授業に対する興味・関心度

1) 授業の難易度・内容量

学校において、日々の授業は教師にとっても生徒にとっても大きなウエイトをしめる。生徒は日々展開される授業及び授業内容をどのように感じているのであろうか。「この授業は難しい」と考えているかどうかをたずねてみると、64.5%の生徒が難しいと肯定的回答をしている。授業を通して、新たな知識や技術を身につけ、新たな発見をするものである限り「易しい」ものではない。難しいが、教師の指導により内容を理解していくべきものであることはいまでもない。この授業に理解が伴わないと、やはり授業は難しいと感じることになるであろう。

それでは授業の理解に関し、どのように考えているのであろうか。「この授業の内容は理解できた」かどうかをたずねてみると、理解できたと肯定的回答をした生徒は57.9%である。逆にいうなら、40%以上の生徒が授業を理解していないことになる。高校が多様化している今日、多様な生徒が入学してくる現実をみたとき、一律に授業を進めることの困難さがかえるといえるかも知れない。多様化する高校、多様化する生徒を前提とした授業のあり方が考えられなければならない。

ここで、授業理解と授業内容量との関係についてみてみよう。授業の内容量の多さは、授業を十分理解しにくいということにつながる要因になりうると思われる。「この授業の内容は多すぎる」かどうかをたずねてみると、64.2%の生徒が多すぎると回答している（肯定的回答）。上述した視点からみると、少なくとも調査対象の生徒にとっては、授業の内容量が多く、理解に困難を伴っていると感じている生徒がそれなりにいるといえよう。

工業科と普通科を比較した時、有意差のあるものは「この授業の内容は理解できた」（工業科・52.8%、普通科・73.0%）であった。工業科の生徒の授業理解は、半数を少し上回る程度である。この結果に関してはさまざまな要因が作用しているようだが、それらをふまえた授業のあり方が考えられねばならない。

2) 授業の興味・関心、達成度

授業は難しい、授業を十分に理解していないと感じている生徒が比較的多いが、では生徒は授業に興味・関心を示しているのであろうか。「この授業に興味を持てる」かどうかをたずねてみると、興味を持ると肯定的回答をしている生徒は55.2%である。視点を変えれば、約45%の生徒は授業に興味を示していないことになる。授業に興味関心がない、それゆえ授業理解が十分なされていないのかあるいはその逆なのか、さらに議論がなされねばならないところであるが、授業に興味・関心を持っていない生徒の増加は、今後の高校教育を考える上で重要な問

題を提起してくるといい。¹³⁾

工業科と普通科の比較で有意差がみられた項目である「この授業には興味が持てる」に対し「はい」と回答した生徒は工業科が11.5%、普通科は33.9%である。また「どちらかといえばはい」に対しては工業科33.0%、普通科31.8%であり、普通科の生徒の肯定的回答率が高い。生徒が所属する学科・コースによりカリキュラム、そこでのねらいに「ちがひ」があるのは当然である。生徒の実態や目的意識等をふまえた授業の見直しをすすめることにより、興味・関心を向上させる授業をおこなうことが求められる。

続いて「この授業で達成感を得ることができた」かどうかをたずねてみた。達成感を得ることができたと感じている生徒は52.3%である。達成感をどのように理解しているかは、この項目のみでは説明しにくい、「授業に満足」しているといい換えることができるかもしれない。やはり授業を理解できているということが、達成感につながっているといえよう。この項目において、工業科と普通科の間に有意差がみられ、肯定的回答は工業科46.6%、普通科58.6%であった。

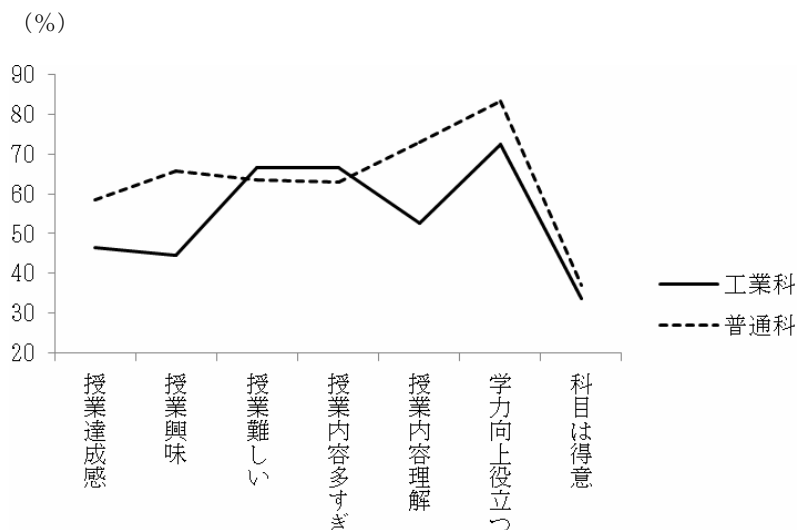


図4 授業の興味・関心（肯定的評価）

3) 授業の有効性

ここでいう授業の有効性とは、授業が学力（技能・技術も含む）をつけるのに役立っているということである。「この授業は学力（技能・技術も含む）をつけるのに役立つ」かどうかをたずねてみた。全体として77.6%の生徒が「授業は学力をつけるのに役立つ」と回答している。「授業は学力をつけるのに役立つ」という項目と、「授業を理解している」（57.9%）、「授業に興味がある」（55.2%）、「授業は難しい」（64.5%）を比較してみると、授業は学力をつけるのに役立っているということに対する肯定的回答が多い。授業は難しく感じ、また興味もそうあるわけではなく、理解していないこともあるがしかし授業は学力をつけるのに役立っていると考えている生徒がそれなりにいるということであろう。最後に「この科目は得意」かどうかをたずねてみた。得意であると肯定的回答をした生徒は35.2%である。すべての科目を調査対象

としたわけではない。調査した科目が得意ではないという見方もできるが、学習意欲の欠如も指摘できるかもしれない。工業科と普通科を比較してみると工業科生徒の72.4%、普通科生徒の83.4%が「この授業は学力をつけるのに役立った」と回答している。ある面では授業に満足し、他の面では満足していないという多様な評価が浮かび上がってきたといえよう。

以上のことから次のことが指摘できよう。普通科と比べて実学的な部分で実習を導入して、普通科よりも直接将来の役に立つ「勉強」を行っているはずの工業科であるが、工業科の生徒よりも普通科の生徒のほうが授業は学力をつけるのに役立つと考えている。これは、工業科の生徒が「学力」というものをどのように捉えているかに関係する。つまり、「学力」を自己の技術力の向上（たとえば電気工事の技術や機械操作の熟達など）に役立つことと切り離して理解していることも考えられる。

しかし前述したように、授業の達成感や授業自体の興味や理解、授業参加の様子を含めてみた場合に普通科の生徒より有意に低い結果が出ている。このことから、実習を多く持つ工業科の授業に対して工業科の生徒が、普通科の生徒より授業が役立たないと考えていることには問題があると思われる。実際的な場面（実習など）に即応した知識を伝授する際の授業内容の構成や授業方法の研究など、授業改善が求められているといえよう。もちろん、この指摘は普通科にもいえることである。机上の「勉強」だけではなく、実際社会や生活場面での体験的な知識とのつながりを持った授業内容の構成や授業研究の必要性は、昨今の「生きる力」や「PISAショック」の問題からも強く求められている。

また自分の将来への展望や進路への希望をしっかりと持ち、現在の学校で学ぶ内容が将来の「達成」に結びつくという感覚を持つことができれば、生徒は「学力に役立つ」と評価すると考えられる。つまり、生徒自身が自分の進路希望や将来展望を、どれだけ目的意識として強く持っているかが重要な要因として働くと思われる。このことから、改めて進路指導の重要性が指摘できよう。

ただし、生徒は高校進学の時点の成績により就職や進学を決める傾向が強い。つまり、「輪切り」と呼ばれる、成績での序列化で高校進学が決まる可能性が強い現状が存在する。そのような状況下では、多くの生徒が入学時点で学力に関する自己肯定感は低いという理解も必要であろう（図4は授業の興味・関心度に対する肯定的評価の一部を示したものである）。

4) 生徒の生活面

生活面については今回新しく入れた項目である。「起床時間、就寝時間はだいたい決まっている」・「保護者と話すことが多い」かどうかに関してたずねた。「起床時間、就寝時間がだいたい決まっている」という項目に関する肯定的評価に、有意差はみられなかった（工業科・69.0%、普通科・67.2%）。「保護者と話すことが多い」に関しては、工業科64.7%、普通科82.9%で有意差がみられた。

一般的にいうなら、保護者と話をする生徒ほど教師に対する親和性が高く、授業評価が高くなる傾向があるといえるかもしれない。¹⁴⁾ 保護者と会話をおこなうことで、家庭的にも安定し、学校生活を送る上での教師や友人等との関係において信頼感が醸成されると考えられよう。換言すれば、このことは学校や家庭、社会生活における安定性を意味すると思われる。

保護者と話をするということは親からの影響力を受けやすいということであり、今まで述べてきた工業科と普通科生徒の学習に対する差異の一つの現れは、家庭における学習習慣の確立という面の影響も考えられる。それゆえ、授業技術の向上や授業評価により質の高い「学力」

を保障することが学校（公教育）重要な役割であるといえよう（図5は生徒の生活面の肯定的評価を示したものである）。

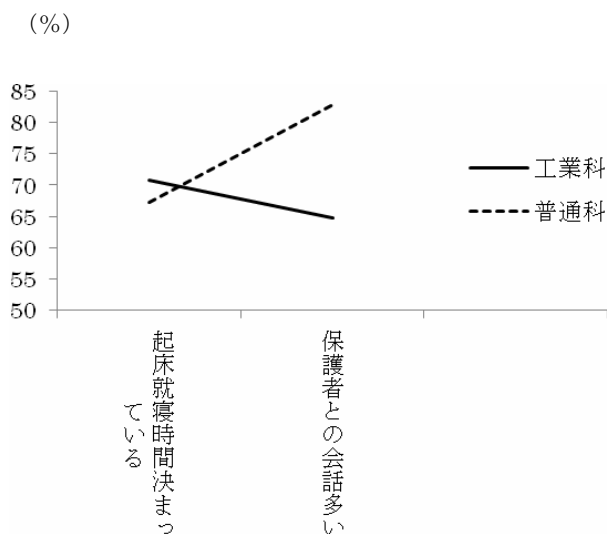


図5 生徒の生活面(肯定的評価)

終わりに

教育活動において、授業は大きなウエイトを占める。授業には教師の個性や力量、性格特性などが、また授業を受ける側の生徒の能力や個性等さまざまな要因が反映され、それらが複合的に絡み合い授業が成立することになる。しかし授業には教師の力量が多大な影響を与えることは間違いないといえよう。その意味では教師の「授業力」がきわめて重要になる。それゆえ教師は話の単調さを避け、授業を面白くする話法・話術とともに、身近な教材開発の工夫やそれに対する発問の組み立て、題材や発問を生かす授業を構成するための研究が重要になる。もちろん、その前提になるのは生徒の実態を把握し、理解した上での題材選択と開発である。さらに発問に対する予想される解答と、それらに対応する授業の組み立ての変化への見通しを持つことであろう。そのためには、授業の目的を達成するための地道な授業研究が必要になる。

授業の目的は、授業を通して生徒に知識や技術を習得させ生徒自身に変容をもたらすことである。このことを、教師一人でおこなうには限界があろう。そこで各種研修会への参加と同時に、問題や課題を共有することが可能な同じ職場に勤務する教師相互の「同僚性」にもとづいた「協働」により、授業実践の情報交換と自己研鑽を積むことが重要になる。

いうまでもなく、このことは学校教育目標にも関係する。学校は1つの組織体であり、組織の諸要素を有効に活用し、学校教育目標を効果的に達成することをねらっている。学校教育目標を効果的に達成するためには、今日の学校組織のあり方が検討されねばならない。人的・物的側面を含め、組織構成要因が有効に作用することにより、学校教育目標が達成される。学校に教育上の問題点があるとすれば、学校組織を変革していかねばならない。換言すれば、学

校改善が目ざされなければならないのである。学校改善の1つの方法として、教師が日々おこなっている授業を見直すことから始めることも有効であると思われる。学校改善のための授業評価として、まず授業を受けている生徒が授業をどうとらえ評価しているかを理解することは重要である。そこで、生徒による授業評価をおこないその結果を教師が相互に共有しつつ解決すべき問題を見出し、学校全体で組織的に取り組むことが重要になると思われる。

ただ授業評価の有効性や信頼性に関しては、評価する側の「評価能力」をふくめてなお議論の余地があるところである。したがっていかなる視点で、授業の何をどのように評価するのか等が十分に考えられねばならない。学校では、生徒の好みだけを重視したカリキュラムづくりなど行われるはずはない。しかし、単に従来のような授業のやり方では通用しなくなっている現実を十分認識し、新たな授業を創造していくことが求められている。このことが学校改善の第一歩になるであろう。¹⁵⁾

注

- 1) 授業改善に関しては小・中学校、高等学校のほうが、大学が授業改善を試みる以前に取り組んできていると思われる。それは、児童生徒のよりよい授業理解を求めて、教師が主になった授業改善である。授業受講者による評価を中心にした授業改善ではないといえよう。
- 2) 中留武昭・論文編集委員会『21世紀の学校改善』 77頁 第一法規 2003年
- 3) 同上書 76頁
- 4) 高等学校の教師を対象にした授業評価に関し、筆者(山崎・深尾・岡)はすでに論文を発表してきている。
山崎・深尾・岡「学校改善と授業評価(Ⅰ)―高校生の授業評価を中心に―」
大分大学教育福祉科学部研究紀要 第27巻第2号 2005年
山崎・深尾・岡「学校改善と授業評価(Ⅱ)―因子分析を中心にして―」
大分大学生涯学習教育研究センター紀要 第6号 2006年
- 5) できるだけ多くの教師の参加を希望したが、諸事情により授業評価に積極的に参加して下さった教師は4人であった。学校現場では授業評価の意味がまだ十分に浸透していないと思われる。
- 6) 生徒に対する質問以外に、教師用のフェースシートとして20項目を質問している。
- 7) これは単に工業科担当教師の問題だけではない。受講している生徒の授業の取り組み方等により、評価結果が出てくるのでまったく生徒に問題がないわけではない。
- 8) このような差異が生じる要因を見つけ出し、対処することが早急に求められる。それぞれの学科に適した指導方法を確立することにより、よりよい授業の探求が可能になる。
- 9) 授業に対する興味・関心や授業集団の構造、さらには教師および生徒のパーソナリティ等さまざまな要因が作用していることは間違いない。単に教師の力量の問題に収斂することはできないと思われる。
- 10) http://benesse.jp/berd/center/open/report/gakukihon4/2006/sokuho_pdf/gakukihon4_soku.pdf
- 11) 高校レベルや個々の生徒の卒業後の進路等により、予習・復習の取り組み方は異なってくると思われる。
- 12) 山崎・深尾・岡著 前掲論文を参照されたい。
- 13) 小学校や中学校においても授業に興味関心を示さない児童生徒の増加が指摘されている。いわゆる7-5-3といわれる状況が事実だとすれば、今後さらにカリキュラム未消化の児童生徒が増加することは間違いないと思われる。

- 14) 今回このことに関しては、データのにも検証していない。しかし家庭における保護者との会話は、学校生活の様子に大きな影響を与えるものと思われる。
- 15) 山崎・深尾・岡 前掲論文「学校改善と授業評価（Ⅰ）」 226 頁

A Study of School Improvement and Teaching Evaluation (Ⅲ)

—Laying Stress on the Consciousness Investigation
of High School Students in General Course and Vocational Course—

YAMASAKI, Kiyoo., FUKAO, Makoto and OKA, Yoshihiro.

Abstract

At present time, we are confronted with pathology of education. As one of sources in the problems, we can point out the changes in modern society. School is a system that is constructed in society.

According to changes in modern society, schools must change their functions. If schools don't change their functions, they can't satisfy needs that pupils and society demand.

On that point, school improvement is requested. As a plan of school improvement, teaching evaluation by pupils is very important. Teaching evaluation by pupils is useful for improvement of teaching method that teachers perform everyday.

A progress in teacher ability leads school improvement. In that respect, teaching evaluation by pupils is concerned with school improvement. Therefore, we try teaching evaluation that is rated high school pupils. High school pupils are divided two groups. One group is constituted general course pupils, the other is constituted by vocational pupils. There are many differences between two groups. Therefore, teaching improvement is needed from a view point of a curriculum.

【Key words】 Teaching Evaluation, School Improvement, Teaching Management, Educational Reform